業務資料No.468

昭和51年度

市場調査報告書

カカオの市況構造および奨励政策

昭和53年3月

JICA
703
81.4
ESE
LIBRARY

国際協力事業団

国際協力事業団	
受入月日 '84. 4.10	703
	81.4
登録No. 03184	ESE

はしがき

本調査は、当事業団在外支部が管内移住地の主要生産物に関する生産、流通機構等をミクロ的に把握することを目的に実施している市場調査の昭和51年度分として、サンパウロ支部が実施したものである。

国際協力事業団
移住第I業務部長

JICA LIBRARY
1025427[4]

目　　次

I　緒　　言 …… 1

II　カカオの生産、市況の概要 …… 2

III　世界のカカオ生産および輸出入 …… 4

1.　世界のカカオ生産 …… 4

2.　世界のカカオ輸出 …… 5

3.　世界のカカオ輸入 …… 8

IV　国際価格の推移 …… 9

V　ブラジルのカカオ生産 …… 11

VI　ブラジルのカカオ輸出 …… 14

1.　輸出量 …… 14

2.　輸出先 …… 15

3.　輸出制度 …… 17

(1)　輸出制度 …… 17

(2)　輸出品質規格 …… 17

VII　ブラジルのカカオ生産奨励政策 …… 19

1.　経　　緯 …… 19

2.　カカオの行政機構 …… 19

3.　Procacau …… 22

4.　農業融資制度 …… 23

I 緒　　言

1. 調査の目的

カカオの世界市場の動向および、ブラジルカカオの現状を調査し、関係移住地のカカオ生産奨励の資料に供する。

2. 調　査　員

サンパウロ支部

但し、調査は、コチア産組果樹担当技師久我徳二氏に依頼。

3. 調査期間

昭和52年3月

4. 調　査　地

ブラジル

Ⅱ　カカオの生産、市況の概要

カカオは、ガーナ、ナイジェリアを主とする西アフリカ諸国と、ブラジル、エクアドル等の中南米諸国などの南側国の主要な輸出産品の一つであり、世界の資源問題での対象産品の一つにあげられている。

カカオに関する国際的な動きとしては、１９７３年第一次国際ココア協定が結ばれ、１９７６年１０月よりは第二次協定として、協定更新がなされている。しかし、現在の高値に対しては、コーヒー協定同様、北側消費国からのコントロールが出来ない状態が続いている。

また、ＥＣ諸国は、資源問題の発生から、北側の具体案として、１９７５年、ＡＣＰ諸国との間にロメ協定を発表し、ココア、コーヒー、茶、綿花、硬質繊維、鉄鉱、バナナを対象品目として、保証価格帯を定めた。ロメ協定は、中南米に対し直接の影響を与えないものの、ココアの場合、アメリカの消費が２０％を割り、ＥＣを含むヨーロッパが最大の市場であるところから、間接的影響は大きい。

カカオの国際価格動向を、ニューヨーク相場（銘柄　ブラジル/61　バイアSuper）を例に取ってみると、ポンド当たり、１９７２年３１.１セント、１９７３年６１.１セント、１９７４年８８.４セント、１９７５年６５.０セントと推移し、１９７５年度は、大巾下落を見たものの、１９７６年下期から急騰を始め、１９７７年となって史上空前の１８０セント台となった。先物の動きを見ても、１９７７年の新収穫物の船積みが開始される９月限りでも１５０セント台となっており、依然、高値が続くものと思われる。

ブラジルのカカオ生産は、現在約２０万トンで、世界生産の約１３％を占め、世界第４位の生産国となっている。さらに、生産奨励政策Procacau（カカオ振興計画）では、１９８５年には、５０万トンの生産目標をたてている。

ブラジルのカカオ生産の歴史は、比較的古く、主生産地であるバイア州に

は、１７４６年導入されている。しかし、その栽培は、略奪的粗放農業で、増産は、もっぱら増植にあり、生産性の向上策は、何らとられていなかった。１９５７年になって、カカオ園の土地病害による、減産防止のため、連邦政府により、PLEPLC計画（カカオ農村経済回復計画）がたてられたが、これがはじめての対カカオ政策といえよう。その後、１９６４年になって、現在の革命政権が誕生し、同年CEPEC（カカオ中央研究所）が設立され、１９６５年CEPARC（カカオ地域中級学校）が開校された。この時点から、技術指導による生産性の向上、奨励の為の農業融資、農村振興、調査研究等の種々施策が実施されはじめた。１９７４年革命政権第４代のガイゼル政権発足とともに、さらに急激な変化があらわれた。それは、同政権の出した農業機構改革によるもので、従来、大蔵省管轄であったCEPLACが、農務省に移管され、１９７６年には、CMN（通貨審議会）によって、従来の農業政策が再検討され、その結果、Procacau（カカオ振興計画）もさらに強化されることとなった。

Ⅲ　世界のカカオ生産および輸出入

1.　世界のカカオ生産

近年の世界生産量は、第1表に示すごとく１４０万トン～１５０万トンとなっており、徐々にではあるが増加の傾向を示している。

第1表　世界のカカオ生産計（カカオ豆）

千トン

州　別	主要生産国	1969/70	1970/71	1971/72	1972/73	1973/74	1974/75
北・中アメリカ	ドミニカ	44.0	26.7	44.6	30.0	32.0	35.0
	メキシコ	24.0	25.0	32.0	26.6	26.8	27.0
	その他	20.9	20.2	23.5	22.7	21.7	23.6
	計	88.9	71.9	100.1	79.3	80.5	85.6
南アメリカ	ブラジル	200.6	182.4	164.3	158.7	238.5	189.0
	エクアドル	55.0	71.6	64.9	54.0	60.0	54.0
	コロンビア	19.0	21.0	22.0	23.0	24.5	26.0
	その他	22.5	22.6	22.7	19.7	18.7	18.7
	計	297.1	297.6	273.9	255.4	341.7	287.7
アジア	計	10.5	11.0	12.0	14.5	19.5	21.8
アフリカ	ガーナ	414.3	406.0	470.0	415.7	343.0	386.0
	ナイジェリア	220.8	304.8	256.6	241.1	214.0	230.0
	象牙海岸	180.7	179.6	225.8	185.0	210.0	220.0
	カメルーン	108.3	112.0	123.0	106.9	124.5	126.0
	トーゴ	23.6	27.9	28.2	18.6	16.5	23.0
	その他	63.1	77.1	66.9	64.8	52.7	52.8
	計	1,010.8	1,107.4	1,170.5	1,032.1	960.7	1,037.8
オセアニア	ニューギニア パパア	22.3	28.0	29.9	23.1	30.0	34.0
	その他	3.4	3.2	3.0	2.0	2.9	3.1
	計	25.7	31.2	32.9	25.1	32.9	37.1
世界合計		1,433.0	1,519.0	1,590.0	1,406.0	1,435.0	1,470.0

FAO Year book

１９１０年頃は、ブラジルが最大生産国であったが、その後アフリカ地域が著しく伸び、現在では、世界総生産量の約２５％を産するガーナが第1位となっている。州別に見ると、アフリカが約７０％、南米が約２０％、その他で１０％となっており、主要生産国は、ガーナ、ナイジェリア、象牙海岸、ブラジル、カメルーン、エクアドルで、世界の約８０％を生産している。

カカオの生産は、他の作物と比較すると、増減差が小さいのが特性であるが１９７２／７３年には、前年比１１.６％の減産となった。過去の最高生生産年次は、１９７１／７２年で１５９万トンの生産を上げている。オイルショック後の生産回復は、徐々になされているものの、１９７４年、１９７５年と停滞気味で、１９７１／７２年のレベルには達していない。しかし、１９７６年下半期からの相場急騰に支えられ、１９７６年、１９７７年には、かなりの増産が見られるものと期待しうる。

2. 世界のカカオ輸出

近年の世界総輸出量は、１２０万トン前後で生産の約８０％が輸出に向けられ、２０％が国内消費向けという、典型的な国際商品となっている。

輸出量の伸びは、１９７３年度の大巾減産と、オイルショック後の停滞により、数量的には、不調であるが、輸出金額の面では、大巾に増加しており、特に１９７６年下半期からの高値で、3倍以上の成長を示すものと思われる。

世界のカカオ輸出は、第２表に見るごとく、アフリカが約８３％、南米が約１０％で、この両州により９０％以上が占められている。最大輸出国は、ガーナで、世界の約３７％を輸出しており、生産シエアより輸出シエアの方が高くなっている。その他の主要輸出国は、生産主要国と同様であるが、アフリカ地域の方が、南米地域よりも、生産に対する輸出比率が高くなっている。これは、国内消費力の差によるものであろう。

第2表　世界のカカオ輸出量（カカオ豆）

千トン

州　別	主要輸出国	1968	1969	1970	1971	1972	1973
北・中アメリカ	ドミニカ	25.3	23.8	34.4	27.8	32.2	23.0
	その他	22.0	24.9	21.5	17.3	32.1	22.0
	計	47.3	48.7	55.9	45.1	64.3	45.0
南アメリカ	ブラジル	75.8	119.6	119.8	119.1	102.3	82.8
	エクアドル	67.2	32.4	36.5	50.9	45.4	30.1
	その他	14.5	11.0	12.2	11.6	10.3	9.8
	計	157.5	163.0	168.5	181.6	158.0	123.0
アジア	計	3.9	3.5	4.2	5.4	6.4	7.0
アフリカ	ガーナ	335.3	308.6	367.4	314.2	412.2	422.1
	ナイジェリア	208.9	173.6	195.9	271.7	227.5	213.9
	象牙海岸	121.5	118.9	143.2	146.9	159.4	142.9
	カメルーン	65.6	73.8	72.0	79.9	81.6	86.5
	トーゴ	14.3	18.7	30.5	27.2	27.1	17.7
	その他	69.6	60.3	56.4	78.2	74.8	66.9
	計	815.2	753.9	865.4	918.1	982.6	950.0
オセアニア	ニューギニア・パプア	24.8	25.6	23.9	32.2	26.5	23.6
	その他	3.5	3.6	3.3	3.5	2.2	1.4
	計	28.3	29.2	27.2	35.7	28.7	25.0
世界合計		1,052.2	998.2	1,121.1	1,185.9	1,240.0	1,150.0
再輸出量		11.5	15.2	10.0	9.0	6.3	14.0

FAO Year book

なお、北側の主要消費国の国民一人当たりカカオ消費量は第3表のとおりである。

第3表　主要消費国の国民一人当たり年間カカオ消費量

	Kg
スイス	3.0
西ドイツ	2.9
ベルギー	2.4
イギリス	2.2
アメリカ	1.9
カナダ	1.5
スエーデン	1.5
オランダ	1.5

第4表　世界のカカオ輸入量（カカオ豆）

千トン

州別	主要輸入国	1968	1969	1970	1971	1972	1973
ヨーロッパ	西ドイツ	137.2	131.5	124.9	144.3	142.3	151.6
	オランダ	112.9	109.7	116.0	120.0	122.4	119.2
	イギリス	77.4	102.3	82.2	84.8	110.7	95.0
	イタリア	40.7	42.5	42.3	397	40.6	42.9
	フランス	43.8	39.6	39.7	40.0	45.3	42.0
	ソ連	109.0	986	99.9	138.3	132.0	119.1
	その他	212.5	202.4	208.2	209.6	246.9	227.2
	計	733.5	726.6	713.2	776.7	840.2	797.0
中・北アメリカ	U. S. A.	231.7	222.0	283.7	320.9	286.7	251.9
	その他	18.6	13.9	17.7	18.1	21.8	16.1
	計	250.3	235.9	301.4	339.0	308.5	268.0
南アメリカ	計	199	17.7	25.0	23.0	23.5	22.0
アジア	日本	355	31.8	34.9	38.7	35.9	38.9
	その他	12.5	7.8	9.0	11.4	16.3	21.1
	計	48.0	396	43.9	50.1	52.2	600
アフリカ	計	8.5	7.1	6.5	7.4	8.5	6.5
オセアニア	計	15.5	15.8	19.2	186	223	164
世界合計		1,075.6	1,042.8	1,1091	1,215.0	1,255.1	1,167.9

3. 世界のカカオ輸入

世界最大の輸入国は、第4表に見るごとくアメリカで総輸入量の約２０％をしめているが、地域別に見ると、ヨーロッパが圧倒的に高く約７０％までを占めている。ヨーロッパの主要輸入国は、西ドイツ、ソ連、オランダ、イギリスなどであるが、カカオの輸入の特性として、他の作物のごとく数ケ国に集中する傾向がなく、約４０ケ国以上の諸国が輸入を行っている。

第５表　カカオの世界需給関係

単位1000 ロングトン(2,240ポンド)

(1)	年度始ストック	生産量(2)	総供給料	消費量	年度末ストック	ストックの増減
1962—63	553	1,152	1,705	1,133	572	＋ 19
1963—64	572	1,204	1,776	1,170	606	＋ 34
1964—65	606	1,467	2,073	1,280	708	＋182
1965—66	788	1,193	1,981	1,354	627	—161
1966—67	627	1,320	1,949	1,366	581	— 46
1967—68	581	1,320	1,901	1,384	517	— 64
1968—69	517	1,209	1,726	1,347	379	—138
1969—70	397	1,404	1,783	1,335	448	＋ 69
1970—71	448	1,464	1,912	1,398	514	＋ 66
1971—72	514	1,564	2,060	1,498	562	＋ 48
1972—73	562	1,359	1,921	1,591	330	—232
1973—74	330	1,408	1,738	1,453	285	— 45
1974—75	285	1,419	1,704	1,373	331	＋ 46

(1) ココア農年度は９月～１０月
(2) 生産量は総生産量から1％の重量ロスを引いたもの
1973/74：暫定　1974/75 予想
Foreign Agricultural Seruice U.S.P.A

なお、世界の需給関係を見ると、第５表に示すごとく、１９７３年、１９７４年は、消費量カバーのため、備蓄の喰込みが見られる。

Ⅳ 国際価格の推移

ニューヨーク国際相場は、相場銘柄バイア№1（Super）に例を取って見ると、第6表、第1図のごとく推移している。

１９７３年以前の最高値は、朝鮮動乱後の世界的好況を反映して急騰した１９５４年の５５.７セント／ポンドで、その後１９７２年までの１８年間は、低迷を続けてきた。１９７３年に入り、国際ココア協定が成立し、生産国間の輸出割当によるコントロールが行なわれたことと、１９７２／７３年度の生産量が減少したことにより６１.１セント／ポンドに高騰し、１９年目にして最高値を更新した。しかし、１９７３年下半期になると急落し、オイルショック時点では、５０セント台にまで下がった。ただ１９７４年になってすぐ９０セント台までに上がっている。１９７５年に入ると再度５０セント台まで急落するが、ブラジル、バイア州の旱魃、アフリカの政情不安などにより減産傾向があらわれ１９７５年下期から徐々に上昇を始め、１９７６年６月以降、相場は急騰し、１９７７年に入って１８０セントの大台と記録するにいたった。

(注) 現物銘柄としてバイア，ガーナの２タイプがあり、ガーナの方が５～１０％高値。

第6表 バイア№1（Super）のニューヨーク現物相場年平均価格の推移

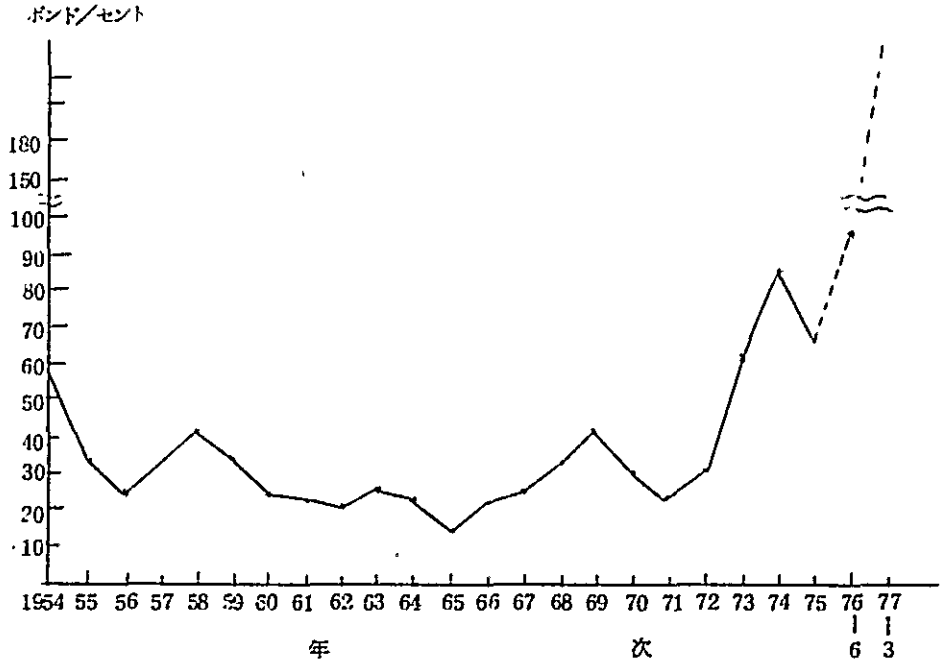
セント／ポンド

1954	55.7	1966	23.0
1955	36.2	1967	26.3
1956	25.5	1968	33.0
1957	30.5	1969	43.5
1958	43.3	1970	32.0
1959	35.4	1971	25.7
1960	26.8	1972	31.1
1961	22.4	1973	61.1
1962	21.3	1974	88.4
1963	26.5	1975	65.0
1964	23.1	1976-6	※ 92.5
1965	16.9	1977-3	※180.0

※暫定 anvario Estatitico do CaCau 1973-75
CaCau atualidade №2, №3-76

第1図　ニューヨーク　カカオの現物相場年平均価格

1954～1976



V　ブラジルのカカオ生産

カカオの原産地は、メキシコからペルーにかけての一帯と言われ、ベネズェラのオリノコ河流域、ブラジルのアマゾン河流域には、現在でも自生カカオが見られる。

近年のブラジルの生産は、２０万トン前後で、ガーナ、ナイジェリアにぐ、象牙海岸、カメルーンと並ぶ生産国となっている。

州別に見ると、第７表に示すごとく、バイア州がブラジル総生産の約９５％を占め、ブラジルのカカオは、バイア州のカカオと云っても過言ではなく、ニューヨーク相場銘柄も、カカオバイアとして通っている。その他の生産州としては、エスピリット・サント州、アマゾナス州、パラ州、アマパ州、マラニォン州、ロンドニア州、ミナス・ジェライス州等がある。

第７表　ブラジルの州別カカオ生産計

州別	1971		1972		1973		1974(1)		1975(2)	
	面積ha	ton	面積ha	ton	面積ha	ton	面積ha	ton	面積ha	ton
アマゾナス	1271	735	1,270	1,054	1,365	1,190	2,800	300	2,600	500
パラー	6,410	1,198	6,277	1,316	6199	1,341			7,058	1,772
アマパ	15	13	7	9	7	4				
マラニョン	17	11	54	9	63	10		156,000		
バイア	415,922	210,715	406,338	210,855	379,108	186,572	485,000		418,906	249,779
ミナスゼライス	14	18	14	18	37	15				
エスピリットサント	24,008	5,985	16,188	8,184	29,316	6,755	20,770	7,164	21,760	7,621
サンパウロ	36	24	36	24	50	29				
合計	447639	218,701	403184	221,159	416175	195,916		164,616		281,766

(1)　７４年度はアマゾナス，バイア，エサント州外　生産量は1,152トンとなっている。

(2)　暫定・

IBGE-L.S.Producão Agricola 1971～1976.11月

バイア州の生産推移は、第8表、第2図に示すごとく、増産傾向を示しており、現行の生産奨励策によって、今後もさらに伸びることが予想されている。FAO等の需要予想も明るいものがある。

なお、カカオ生産変動の最大要因は、旱魃による減産にあるといわれている。

第8表　バイア州のカカオ生産の推移

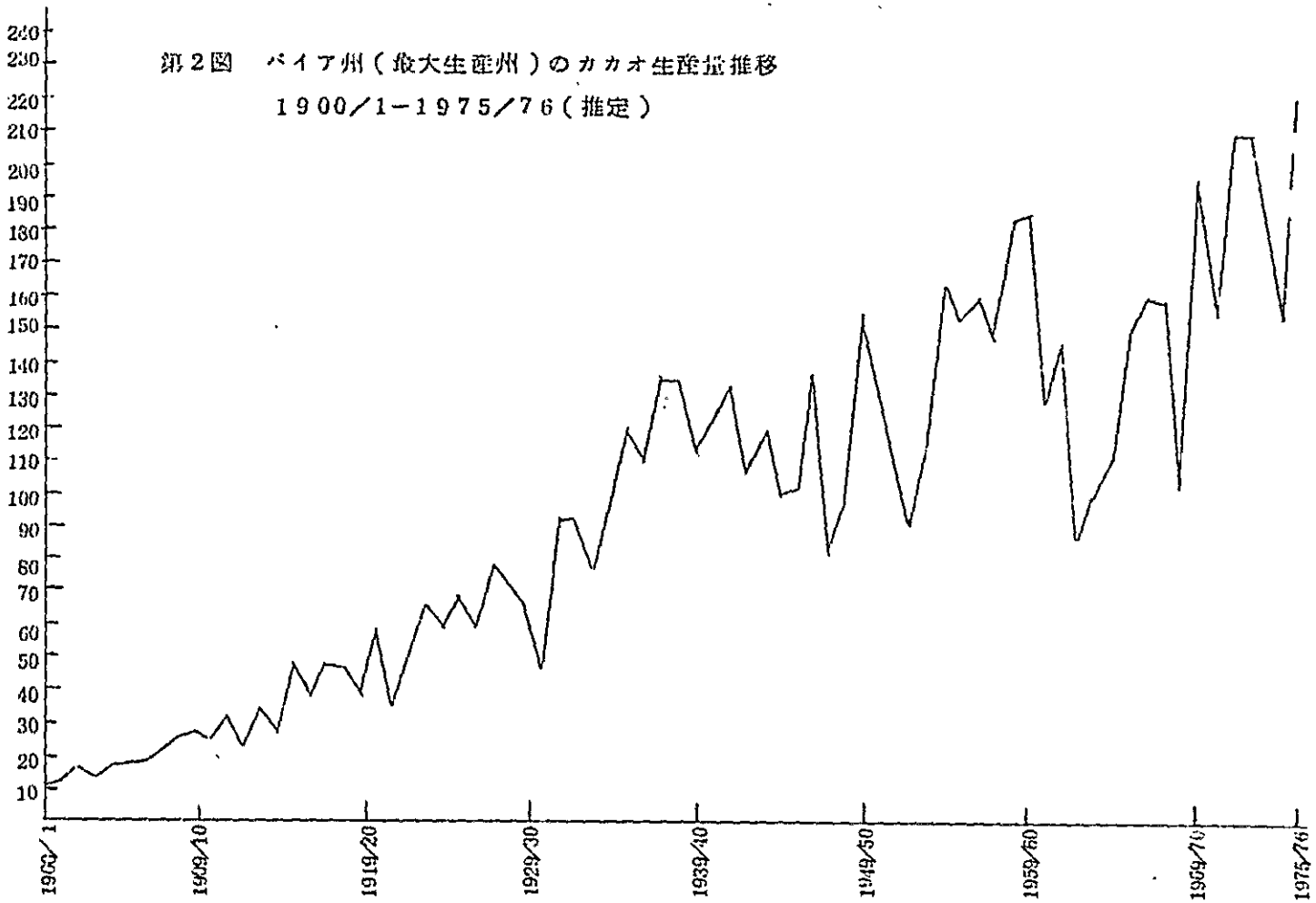
トン

年　次	生産量	年　次	生産量	年　次	生産量	年　次	生産量
1900／1	11.6	1919／20	39.2	1938／39	134.4	1957／58	149.0
1901／2	14.0	1920／21	599	1939／40	114.5	1958／59	185.5
1902／3	18.0	1921／22	25.9	1940／41	126.9	1959／60	179.5
1903／4	14.9	1922／23	54.9	1941／42	134.0	1960／61	129.5
1904／5	18.4	1923／24	66.5	1942／43	108.9	1961／62	149.2
1905／6	191	1924／25	59.4	1943／44	120.1	1962／63	88.1
1906／7	230	1925／26	69.1	1944／45	103.7	1963／64	1054
1907／8	25.3	1926／27	59.2	1945／46	106.2	1964／65	118.4
1908／9	27.3	1927／28	78.1	1946／47	149.1	1965／66	1507
1909／10	29.2	1928／29	72.3	1947／48	83.8	1966／67	161.8
1910／11	27.5	1929／30	67.0	1948／49	102.4	1967／68	160.4
1911／12	32.1	1930／31	46.3	1949／50	157.4	1968／69	106.5
1912／13	23.3	1931／32	92.3	1950／51	131.8	1969／70	197.5
1913／14	369	1932／33	94.8	1951／52	100.7	1970／71	158.2
1914／15	29.4	1933／34	78.5	1952／53	92.8	1971／72	210.7
1915／16	49.4	1934／35	98.6	1953／54	116.9	1972／73	2109
1916／17	39.4	1935／36	120.7	1954／55	167.2	1973／74	186.6
1917／18	491	1936／37	110.5	1955／56	152.5	1974／75	156.0
1918／19	48.2	1937／38	136.1	1956／57	162.5	1975／76	249.8

Anvario Estatistico do CaCau 1973
1971～75 —IBGE— L.S.P.A

第２図　バイア州（最大生産州）のカカオ生産量推移

１９００／１－１９７５／７６（推定）



Ⅵ　ブラジルのカカオ輸出

1. 輸　出　量

ブラジル全輸出に対するカカオの占める割合いは、近年３％を越え、コーヒー、大豆、砂糖、牛肉、綿、トウモロコシ、などとともに主要輸出産品となっている。

カカオの輸出産品は、一般に、原料豆（bean）、抽出オイルであるカカオバター、粕（ケーキチョコレート原料にしたもの）、粉末（オイル分を取らず焙焼、パウダーとした飲料用粉末）の４種に区分される。これら４種に、チョコレート製品をも含めたブラジルのカカオ輸出量は、１９７５年度で約２６万トンであり、その内訳は、第１０表に示すごとく、原料豆としての輸出が圧倒的に多く、約７０％を占めているが、近年加工産業の成長にともなって、徐々にではあるがカカオバター、粕としての輸出が伸びてきている。

第９表　ブラジルの全輸出額に占めるカカオ産品の割合い

％

年　次	カカオビーン	カカオバター	(1)その他	合　計
1972	1.49	0.83	0.03	2.35
1973	1.43	0.77	008	2.28
1974	2.64	1.26	0.21	4.11
1975	2.55	0.70	0.39	3.64

出所　CACEL Brsil Eaportação 1972/75
(1) 粕と粉は含まない

ブラジルカカオの輸出向けと国内消費向けとの割合は、約４：１で、７５％が輸出に向けられている。この比率は、ほぼ世界の平均値と同等であるが、アフリカ諸国と比べると、輸出率は、かなり近くなっている。

第１０表　ブラジルカカオ産品の輸出量

	カカオ豆(ビーン)	カカオバター	カカオ粕(ケーキ)	カカオ粉(パウダー)	その他	(1)合　計
1971	119,071	21,131	19,433	3,454	760	174,102
1972	102,254	27,333	24,881	2,072	1,554	171,161
1973	82,774	24,234	25,155	2,055	1,479	148,163
1974	129,855	28,771	23,844	4,355	3,361	218004
1975	176,658	21,564	22,311	5,867	1,136	257,375

(1)　カカオを原料とするチョコレートその他まで含む
Anvario Estatistica do CaCau 1973～1975
－CEPLAC

2.　輸　出　先

ブラジルカカオの主な輸出先は、第１１表の通り１０ケ国で、全輸出量の約９５％をも占めている。その中で、アメリカが最大輸出先国で約４０％を占めている。つまり、カカオ、コーヒー同様、アフリカがヨーロッパ、中南米がアメリカを主要市場としている。

産品別に見ると、全産品ともアメリカ向けが多いが、特にカカオ粕は、近年７０～８０％まで数っている。カカオバターは、アメリカ、オランダ、ソ連、イギリスの４ケ国で９０％近くを占め、中でも従来からオランダへの輸出が多く、１９７５年度においても、４５％を占めている。

第11表　ブラジルカカオ産品の輸出先別輸出量（１９７５年）

トン( )内%

輸出先国	カカオ・ビーン	カカオ・バター	チョコレート(不含砂糖)	カカオ粕	カカオパウダー	その他	合　計
アメリカ	78,160(43.1)	4,207(19.5)	6,966(39.7)	18,543(80.9)	6,938(57.0)	50 (0.4)	98,440(38.3)
オランダ	17,744(10.0)	9,720(45.1)	17 (0.3)	500 (2.2)	—	—	44,075(17.1)
ソビエト	14,479 (8.2)	900 (4.2)	9,605(55.2)	—	—	—	31,392(12.2)
スペイン	14,196 (8.0)	—	—	200 (0.9)	—	160(14.1)	14,196 (5.5)
ポーランド	11,284 (6.4)	—	—	—	—	2 (0.2)	11,284 (4.4)
西ドイツ	9,966 (5.6)	450 (2.1)	—	—	—	—	11,182 (4.3)
イギリス	515 (0.3)	3,600(16.7)	85 (0.5)	150 (0.7)	—	—	10,385 (4.0)
アルゼンチン	8,280 (4.7)	—	165 (2.7)	1,044 (4.6)	—	—	8,880 (3.5)
日　本	1,191 (0.7)	1,664 (7.7)	130 (0.8)	180 (0.8)	4,569(37.5)	200(17.6)	5,855 (2.3)
ハンガリー	4,700 (2.7)	—	—	—	—	114(10.0)	4,700 (1.8)
その他	16,111 (9.1)	1,023 (4.7)	154 (0.9)	2,294(10.0)	666 (5.6)	610(53.7)	17,076((6.6)
合　計	176,656	21,564	17,392	22,911	12,173	1,136	257,375

Baletim Estatistico do CaCau
CEPLAC—1975

日本に対しては、１９６０年代にカカオバターとして3,000トンほど輸出されたが、１９７０代に入り４００トンほどに減少し、その後また増加の傾向を示しているが、量的には少なく、変動が激しい。原料豆については、数量的にまとまって出たのが、１９７５年の1,２００トンがはじめてである。なお、飲料用パウダーは、１９７３年度より急激に増加しており、主要輸出先となりつつある。

ブラジルのカカオ船積は、バイヤ州のIlhéus港より全輸出量の約８０%が移送されている。カカオは、品質維持が強く要求されるもので、この為、従来から輸送距離が大きく問題視されてきたが、今日では、港湾設備船倉が改良され、このリスクは、かなり低下してきている。また、船積能力の方も整備、増強されてきている。

3. 輸出制度

(1) 輸出制度

カカオの輸出制度は、コーヒー、砂糖を除く他の一般農作物と同様、BANCO DO BRASIL－CACEX（伯国銀行貿易局）の管理となっており、輸出政策決定に際しては、CEPLAC（カカオ農業計画行政委員会）、輸出業界シンジケート、生産組合代表3者の要望を聴取しうるよう配慮されている。

カカオ輸出に関する制度では、粉末輸出に関し、１９７５年１月付中銀通告 GECAM 第２５０号により、５０％以上の砂糖が添加されている場合に限り、F.O.B.価格に対し５％の輸出課徴金が課されることになっているが、その他に対しては、カカオとしての特別な規制、優遇処置は取られておらず、現行の一般的な輸出奨励策をそのまま該当させている。一次産品である原料豆の輸出に対しては、直接的な奨励策はないが、バター、粉末、粕、チョコレートなど、二次産品、工業製品に対しては、ＩＰＩ（工業製品税－連邦税）、ＩＣＭ（商品流通税－州税）および所得税の一部が政府に対する業者クレジット（返還しないが、免税恩典となる。）となる策が取られている。現在、これらに対して、ＩＰＩ５％、ＩＣＭ５％のクレジットが行なわれている。

(2) 輸出品質規格

カカオの品質規格は、１９６８年１１月付CONCEX（貿易審議会）令４２によって第１２表のごとき基準により次の４規格に定められ、輸出用としては、No.1、No.2の２規格とし、その他は規格外となり、厳しい取締りがなされている。No.3は、国内向け原料、No.4は廃物となる。

タイプNo.1　（ Bahia Superior ）

タイプNo.2　（ Bahia good fair ）

タイプNo.3　（ abaixo do Padrão ）

タイプNo.4　（ Refugo ）

第12表　輸出用カカオの品質規準表

タイプ	水分最高限	カビ、虫食い粒の含有量最高	疵症粒の含有量最高	発芽、破砕などの含有量最高
板1 (Superior)	8%	4%	2%	2%
板2 (Good Fair)	8%	6%	4%	4%

(注)(1) 板1のカビ、虫喰い粒は、各々最高含有量2%で、合計4%を超えてはならない。

(2) 板2のカビ、虫喰い粒は、各々最高含有量4%で、合計6%を超えてはならない。

(3) 輸出規格外の板3の基準は、水分最高8%、カビ最高8%、変質最高8%、虫喰い最高5%、発芽、破砕粒最高10%、不純物最高1%となっている。

また、以上の基準の他に、不良豆について醗酵、光沢、芳香、変質等10項目の基準があり、さらに品質検定官による見本採取規定、船積前の保蔵規定などがある。

Ⅶ　ブラジルのカカオ生産奨励政策

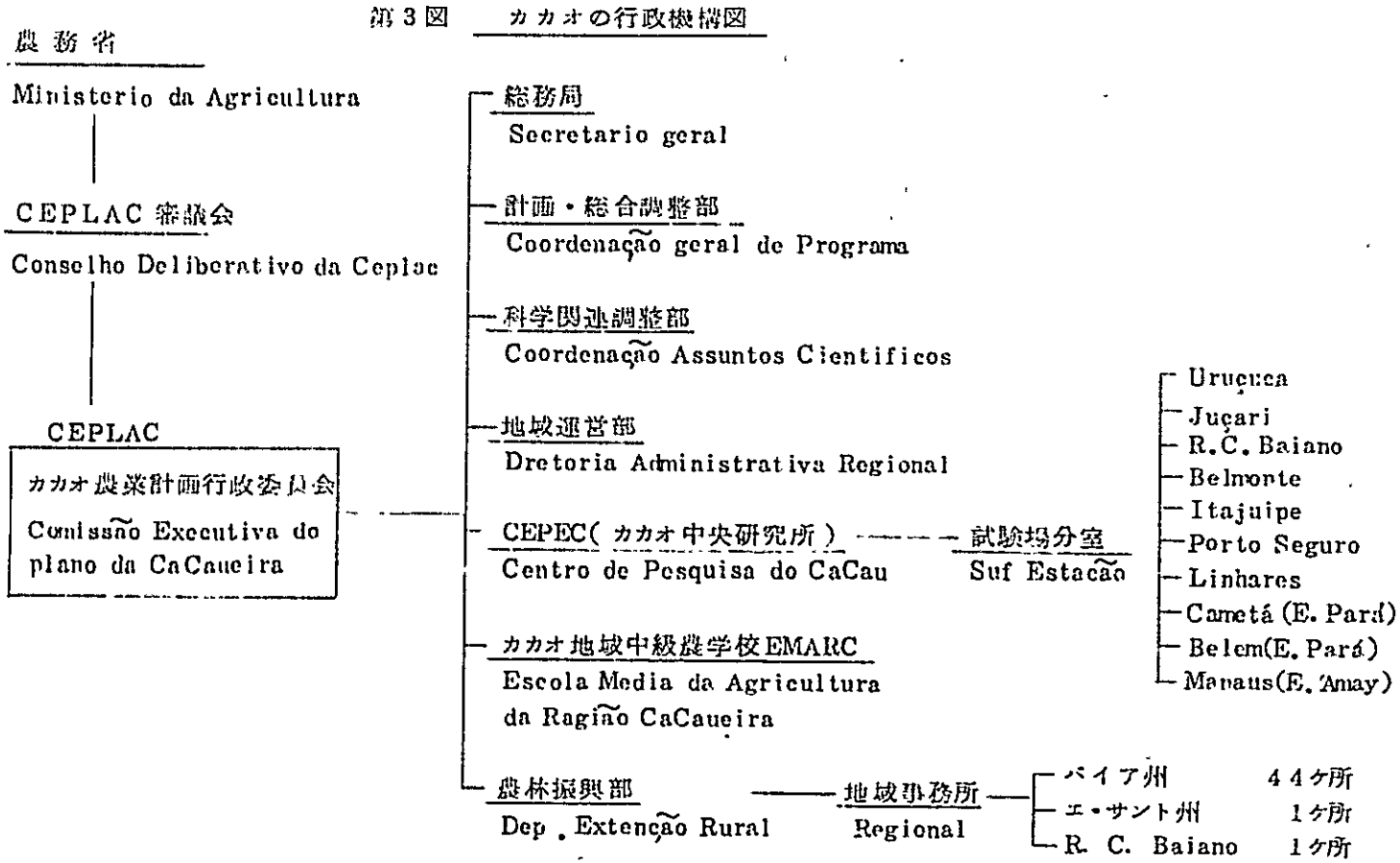
1. 経　緯

１９６９年度より始動した第１ＰＮＤ（第一次国家開発計画）が１９７３年に終了し、１９７４年度ガイゼル政権発足により、１９７４年度から１９７９年度までの５ヶ年の総合開発を対象とした第２ＰＮＤ（第二次国家開発計画）が発表された。この第２ＰＮＤには、第１ＰＮＤの総括とともに、ガイゼル政策の所分野を含んでおり農業面では、農産物の生産強化、輸出拡大、農村振興のための州、地域単位の開発計画が定められ、いわゆる農業構造改革が実行されることになった。そして１９７５年１１月各州の計画が、農業融資制度の統括として農務大臣より発表され、この時点をもって、一連の生産奨励政策、農業計画が明らかにされた。さらに1976年末には、ＣＭＮ（通貨審議会）によって農業政策の再検討、修正され、これによりProcacau（カカオ振興計画）も強化された。

2. カカオの行政機構

１９５７年設立されたＣＥＰＬＡＣ（カカオ農業計画行政委員会）は、１９７４年６月の機構改革により大蔵省の管轄下から農務省管轄に移り、農務省内に、新らたにCEPLAC 審議会が設置され、第３図のような機構に改められた。

第3図　カカオの行政機構図



(1) CEPLAC審議会

(Conselho Deliberativo da CEPLAC)

総裁 — 農務大臣、副総裁 — CACEX(個別貿易商局)理事、局長 — CEPLAC 局長、商工省代表、バイア州代表、エスピリット・サント州代表、カカオ生産者代表の７名により構成されるカカオ行政の最高機関である。

(2) CEPLAC (カカオ農業計画行政委員会)

(Comissão Exectiva do Plano da Caueira)

１９５７年のカカオ政策であったカカオ農村回復計画 (Plano de Recuperasão Economico-Rural da Lavoura Cacaueira) に基ずいて発足したカカオに関する農業政策、総出政策委員会であった。その後、カカオに関する租税を統轄するようになり、１９７４年の農業機構改革からは、今までのカカオ行政の最高機関から、実務機関として活動すべく改められた。

CEPLACは、総務局、計画総合調整部、科学関連調整部、地域運営部、カカオ中央研究所、農村振興部、カカオ地域中級学校の部門からなり、主な事業目的をカカオ行政統轄技術指導、農業投資、農村振興、調査研究、肥料・農薬・機材等農業資材の供給、中級技術者の養成、関連地域のインフラ整備としている。

(3) CEPEC (カカオ中央研究所)

(Centro de Pesquisa do CaCau)

１９６４年連邦のカカオ中央研究所として設立されたもので、７６０ha の試験圃場、実験室、図書館、講習所、コンピューターによるコントロールセンター等の施設を持ち、カカオの研究の他に、熱帯農業の研究多角化農業の研究も行なわれている。また、Itajuipe 分室では、種子生産も行なっている。研究員は８０名で、２２Km da Rodovio Ilhéus－Itabuna , Bahia に所在する。

(4) EMARC（カカオ地域中級学校）

（Escola media da Agricultura da Região Cacaueira）

１９６５年、バイアカカオ院（Instituto de Cacau da Bahia）が改革され、カカオ生産地域の中級技術者養成を目的としたEMARCとなった。ここでは、農場経営の指導、講習なども行なわれる。また、SUDENE，SUDEAVE，INCRA，労働省、州教育局とも連携を持っている。

(5) DEPEX（農村振興部）

（Departamente Extensão Rural）

９３名の大卒技術者、１５０名の中級技術者をかかえ、４６の地域事務所を持って、CEPECの新技術普及、栽培指導、営農相談、農業融資の検討指導を行っている。また、毎年品評会も行っている。

3. Drocacau（カカオ振興計画）

１９５７年に発表されたカカオ農村経済回復計画が発端となってつくられた"Programa Nacional de Extensão da Cacaiucultura"と呼ばれる生産奨励計画である。

当初は、土地の老朽化による低生産性園の再生、回復を主目的に活動がなされ、一部新植に農業融資がなされたが、流通機構、市場価格、輸出政策などのコントロールまで含むような活動は、計画目的の中にはあったものの、なされなかった。現在の種々具体的な奨励活動がはじまったのは、CEPLACが設置されてからである。

Procacauでは、現在の栽培面積約４０㏊、２０万トンの生産を、１９８５年までの間に５０万トンにする増産計画がたてられている。

計画対象地域は、現在の主産地バイア州の他に、エスピリット・サント州、パラ州、アマゾナス州、ロンドンニアも含むものであり、ロンドニア直轄地におけるPalo Cacaueiro de Rondonia（ロンドニアカカオ開

発計画）のような地域計画も持っている。なお、この地域計画は,CEPLACとINCRAの開発協定により1972年に発足している。CEPLACの調査では未だバイア州南部、エスピリット・サント州北部には、100万haの以上の栽培可能地が残っているという。

なお、このProcacauは、1976年CIPN（通貨審議会）により更新が認められ、1977年農務大臣より発表されている。これによると、基本目標を30万haの新植、15万haの更新に置き、1977年度予算1億1400万CrS　1978年度1億2500万CrSとされている。

4. 農業融資制度

前述してきた生産奨励を推進するための具体的方策として農業融資制度がある。

現行制度は、1965年11月付法令482号で制定され、伯国銀行のCREAI（農業信用局）が行うことになっている。取扱い窓口は、伯銀支店を主とし、州立銀行、州開発銀行などであり、融資形態には、営農（人件費、農薬、肥料、新植造園経費等）、設備機械、流通の3種がある。

融資条件は、営農規模を、粗収入により3区分し、年収入が最低賃銀の100倍までを小農、100～1,000倍を中農、1,000倍以上を大農として、各々の融資限度を、小農を最低賃銀の50倍まで、中農500倍まで、大農を1,000倍までと定めている。金利、期限は、対象品目ごとに異なり、時期的調節も行なわれている。

その他の農業融資には、中銀決議第69号（1967年9月付）第260号（1973年7月付）にもとずいた、一般商業銀行に預金高の最低10%までを農業融資に回けさせるという制度のものがある。また、開発銀行、州立銀行を通じて国際金融を利用する方法も取られている。

ブラジルの農業融資は、全融資額の約26%を占め、農業の重要を示している。農業融資の60%以上が、伯銀支店を通じて行なわれており、開

連機関の農業技師の査定、取扱い銀行担当者の見積り書査定を経て決定され、人件費、経営諸費以外は、銀行より直接購入元に対して支払いが行なわれている。